

異文化理解と日本事情教育（二）

——誤解のプロセスをテーマにした異文化トレーニングの試み——

徳井厚子

I はじめに

私たちは日常生活の中において実に多くの誤解を経験している。特に異文化接触という状況においてはコミュニケーション上の誤解は不適応などの深刻な原因ともなりかねない。

日本で学ぶ留学生は学校生活、アルバイト等日常生活の中で多くの日本人と接触しているが、日本人や他の留学生との間でコミュニケーション上の誤解を経験している者は少なくない。ささいな問題である場合もあるが、中には人間関係のトラブルや不適応など、大きな問題に発展する場合もみられる。しかし、こうした経験をクラスの中で体験によって学ぶという方法はこれまであまり取り入れられてこなかったのではないかと思う。筆者はこうした誤解がなぜおこるのか、「コミュニケーションにおける誤解のプロセス」に気付くことにより「異文化交流に大切なことは何か」ということを考えていく異文化トレーニングを日本事情の授業の中で行う必要性を感じた。そこで意味化における3つのプロセス（知覚、解釈、評価）においてどのように誤解が生じたかを異文化トレーニングを行うことによって学んでいくという試みを授業の中でおこなった。

本稿では96年度前期の日本事情（日本の文化）の授業において行った誤解のプロセスを考える授業の実践報告を行う。なお、受講者は留学生（学部一年生）のみであり、国籍は以下のとおりである。

中国9，台湾7，マレーシア11，韓国1，フランス1，ケニア1，パキスタン1，ベトナム1 計32名

II 留学生教育における異文化トレーニングの有効性

水田（1989）は異文化トレーニングを「文化背景の異なる人々とより効果的で良好な相互作用、コミュニケーションをおこなうことを助けるプログラム」と定義し、次のように分類している。（注1）

1 知的アプローチ

- (1) 情報知識の伝達中心のトレーニング
- (2) 状況認識、分析を中心とするトレーニング
- (3) 原因の帰属変換を促すトレーニング

2 自己への気付き啓発アプローチ

- (4) 個人としての自己からのトレーニング

- (5) 文化からのトレーニング
- 3 体験的アプローチ
 - (6) 現場疑似体験
 - (7) シミュレーション
 - (8) 機能ロールプレイ演習
 - (9) 行動強化のトレーニング

水田はこれらは独自に用いられる場合もあるが、組み合わせたり、修正をおこなう場合もある、とのべている。また、教育とトレーニングの違いについて、「教育では学科として予め課題を設定することができるが、トレーニングは、個々の参加者のもつニーズに対応し、参加者が学ぶプロセスそのものに焦点がおかれる」としている。

トレーニングは学習者が主体となり、体験を通じて学んでいくプロセスに焦点をおいた学習であるといえる。異文化トレーニングは海外生活への適応、帰国後の再適応を助ける等の目的で行われているが、日々「異文化接触」の体験をしている留学生にとってもこの学習方法は有効であると言えよう。

様々な背景文化をもつ留学生教育の場はある意味で「多文化クラス」であり、また学生一人一人は日々異文化接触を経験している。そしてその中で日々様々な誤解に直面しているケースがみられる。筆者は留学生教育の中で「誤解のプロセス」に焦点をおいた異文化トレーニングをおこなうことにより、留学生が自らの誤解の体験を整理、客観化することによって「文化背景の異なる人々とより効果的なコミュニケーションを行うためには何が必要か」を考える必要があるのではないかと考えた。

Ⅲ 誤解のプロセスをテーマとした異文化トレーニングの試み

コミュニケーションの過程における誤解の原因の多くは、とくに外部からの情報をどのようにとりいれ、意味化していくか—いわゆる「意味化」の過程—において存在する。グディカンストは、ストレンジャーと効果的なコミュニケーションを行うためには意識的にそこで起こっているコミュニケーションのプロセスに注目する必要がある、としている。

Janet & Milton Bennett (1996) は、特に意味化の過程におけるコミュニケーション上の誤解を意識化させるためのトレーニングとして、“D.I.E exercise”を開発している。DIEとは、Description, Interpretation, Evaluationの略であり、Bennettsは、Descriptionを“What I see”, Descriptionを“What I think”, Evaluationを“What I judge”と定義している。この概念を明確に区分することがコミュニケーション上の誤解を防ぐために必要である、というのがこのトレーニングの目的である。具体的には絵やもの（解釈や評価が分かれそうなもの）をみせ、その絵から様々な記述、解釈、評価を述べてもらう。このようなエクササイズを通して記述、解釈、評価を区分できるようにするのがねらいである。

在日留学生にとって、「意味化のプロセスにおける誤解」の原因を解明するためのトレーニングは重要な意味があると思われる。筆者はDIEexerciseにさらにいくつかのシミュレーションを加えることにより、「描写」「解釈」「評価」の過程においてどのように誤解が生

じるかに気付くためのエクセサイズを行った。具体的な授業のすすめかたは以下のとおりである。（尚、1 a 及び 2 b で 1 コマ（90分）、2 c 及び 3 で 1 コマ、5 で 1 コマである）

- 1 描写のしかたの違いによる誤解
 - a Back to back
- 2 解釈のしかたの違いによる誤解
 - b エクセサイズ 1
 - c エクセサイズ 2
- 3 ふりかえりアンケート
- 4 「身近な体験と誤解」についてのレポート（課題）
- 5 レポート発表

以下、授業の実践報告をおこなう。

1 描写のしかたの違いによる誤解

a Back to back

われわれは外部からの情報をどのようにとりいれているのだろうか。とりいれた情報の「描写」のしかたの違いからくる誤解に気付くためのエクセサイズとして、これまで異文化トレーニングのひとつとして行われてきた“back to back”を行った。

これは、2人一組になり、まず相手に見せないようにして絵を描き、次に言葉だけでその絵について相手に伝え、相手に同じ絵をかいてもらう、というものである。授業ではこのあと、お互いに絵をみせあい、どこで誤解が生じたか、を二人で話し合い、簡単なメモにした。図1はフランス人学生Aの描いたものであるが、これを再現しようとしたのが図2のマレーシアの学生Bによる絵である。学生のコメントは「AとBでは花瓶の形が違う。Aの絵は絵だが高くて花が小さいが、Bの絵は花が大きくて花の中央が違う」であった。

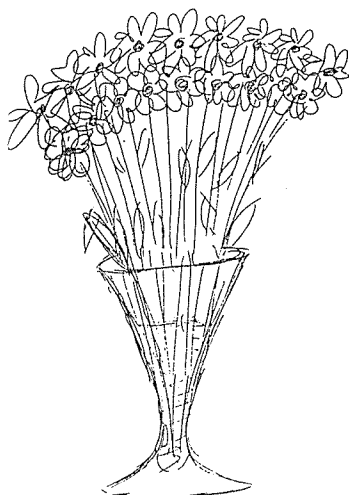


図1

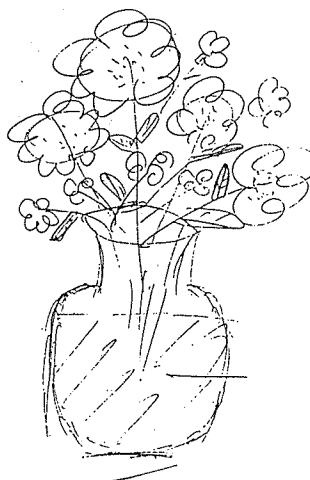


図2

このエクセサイズは、「他人は必ずしも自分が意図したように情報を描写しない」ということに気付くことを目的としている。

2 解釈, 評価のしかたの違いによる誤解

b エクセサイズ1

描写は同じであっても解釈のしかたの違いにより, 評価が異なってくる, というケースはわたしたちの日常生活の中でもよく見られる。この体験を授業の中ではどのようにとりいれたらよいであろうか。授業では, 次のような簡単なエクセサイズを試みた。

- 1) クラスを3グループ(各10名ずつ)に分ける。
- 2) 全員に絵(図3)(人が棒を持って走っている)をみせる。(描写)
- 3) それぞれのグループにこの絵についての解釈(説明)をかいたカードをわたす。
 - A グループ... 祭りをしている, B グループ... マラソンをしている,
 - C グループ... 戦いをしている
- 4) グループ内で, この絵についてどう感じたか(評価)について話しあう。
- 5) A, B, Cの混成グループに編成しなおし(各10名ずつ), 絵についてどう感じたかについて話し合う。
- 6) 5)の話し合いと, 4)の話し合いはどのように異なっていたか, どのように感じたかについて全体で話し合う。
- 7) エクセサイズの終了後, 次のことについてアンケートをとり, 結果をコピーして配る。
 - (4)と5)の話し合いを通じて
 - a 自分と同じ評価をする人に対してはどう思ったか
 - b 自分と異なる評価をする人に対してはどう思ったか
 - c 自分と異なる評価をする人と交流するために大切なことは?



図3

4) について

同じ描写をしても, 解釈が異なることにより, 評価も様々である。グループディスカッションからでた評価は次のとおりであった。

A グループ <祭り>

にぎやか 楽しい 珍しい 団結 すごい 一生懸命 大変
すばらしい

B グループ <マラソン>

疲れた 力がでてくる 楽しい 苦しい
つまらない うれしい

C グループ <戦い>

大変 怖い 危ない 緊張する 苦しい ひどい 怪しい
むなしい くやしい ひどい

5) について

混成グループに編成し直すため、ひとつのグループの中でも「にぎやか」「苦しい」「疲れた」など、同じ絵に対しても様々な評価をもつメンバーが集まることになる。ここでは、誤解に気づき、それを通じて自分自身の考えていた絵の解釈、評価の方法が他人と異なることに気付くことを目的としている。

6) 7) について

意味化のプロセスにおいて、解釈が異なったために評価が異なったことにより生じた誤解の体験をふりかえり、このような誤解が生じた場合にはどのような解決方法が必要かについて考えることを目的としている。

アンケート結果

1 自分と同じ評価をする人に対してどう感じたか

安心、自信 うれしい 正しい 仲間意識 寂しくない やはり自分の方が適当、大多数の意見、通じた、同じ考え、友達になれる、同じ考え、友達、気持ちが良い

2 自分と違う評価をする人に対してはどう感じたか

a 馬鹿だなあと思う、機嫌が悪くなる、嫌だと思ふ

b 理由を知りたい、不思議である、なぜか、何を考えているのだろう、おかしい、変だなあ、納得できない、そんな不可能な評価があるのか、どの角度からみたのだろう

c 相手に自分の意見をもたせたい、

いくら話しても解決できないだろう

d なるほどそういう人もいると思う、他のひとと視点が違う、びっくりしない、(自分と違う人間もいるので、必ずそういう人もいるだろう) 自分の考えと違うところがたくさんある、人は人なりの考えがある、やはり人間の考えは多様 十人十色

e 別に気にしない

f そのような考えがあると思いながらその人たちと話し合おうと思う。

3 違う評価をする人と交流するために大切なことは

理由を聞いてもう一度解釈して、新しい評価をする。お互いに理解する。我慢する。議論する。ちゃんと自分の意見を持って相手を納得できるようにする。相手の考えをきく。なぜ違う評価をするのかわかるようにする。いろいろなコミュニケーションの方法を試せば、必ず解決方法が考えられる。敵意をもたないように交流する。心を開いて相手を受け入れる姿勢が大切。お互いに自分の主張を話し合ってお互いに相手の立場にたって考えること。相手の意見をきき、自分の意見を話し、ゆっくり評価する。違う立場からみると違う意見もある自分の判断が一番正しいとは思わないこと。自己の評価をもちながら、他人と交流して、理解する。相手の立場にたつ。自分の意見をていねいに相手に伝える。自分の意見に堅くならないこと。相手のことを調べておく。広い考え方、客観的にいろいろな意見をうけいれる。

誠意をもつ。いろいろな面から考える。なぜそう思うのかを説明してもらおう。

2については、違いに対して、a 拒否的、b 疑問、c あきらめ、d 納得、e 無意識、f 解決の模索、と様々な感情を持ったことがわかる。

3については、誤解の原因を探るため、評価から解釈へもどる。寛容性、相手の立場にたつ、誠意、多角的解釈、など、様々な方法があげられた。

c エクセサイズ2 (シミュレーション)

解釈の違いにより、評価が異なる、という状況を次のようなシミュレーションを行うことによって試みた。

- 1 クラスを2つのグループに分ける。
- 2 Aグループの国は「腕組みは相手を尊敬することをあらわす」、Bグループの国は「腕組みは相手を軽蔑することをあらわす」ということを書いたカードをわたす。
- 3 Aグループのメンバーが友好条約を結ぶためBグループを訪れ、交渉する。
- 4 ふりかえり討論およびアンケート (結果の配布)
 - 1) 相手の動作をみて、どんな気持ちだったか
 - 2) 相手の動作の意味がわかったか
 - 3) 異文化交流で大切なことはなにか

アンケート結果

- 1) 相手の動作をみて、どんな気持ちでしたか

<腕組みは尊敬の国A (Bに対して)>

- a 自分が尊敬されていると思った3, うれしかった。

相手も人を尊敬する時には同じようにすると思った2

失礼な人だと思った。身分にふさわしくない。礼儀が悪い。えらそう。強くて、友好関係をむすびにくい。

- b あまり気にしなかった。

- c わたしたちと同じ動作をしているが、相手がえらそうな動作をするのは同じように尊敬しているのかと疑っていた。尊敬の意味だけれども、軽蔑だと思う。嫌な感じ。

相手の顔色をみて、自分と同じ動作だけれど、わたしたちを軽蔑していると思った。

<腕組みは軽蔑の国B (Aに対して)>

- a 相手は礼儀をしらない国だと思った。相手がこの国にたずねてきたのだから自分を尊敬すべきなのに、腕をくんでいるので、反感の気持ちをもった。

不愉快になった。おこる。彼等に軽蔑されていると思った。相手は敵だと思った。失礼。がっかりした。へんな癖もっていると思い、親しくなる気持ちがなかった。ひどい人たちだと思った。気持ちがわるくなった。何をしにきているのかわからない。非友好的。何か不満があって抗議にきたかと思った。

感動した。異国にいてむこうの人たちはどういうつもりで行動するのかにもかかわらず、自ら努力してまねをするのは感動的である。

- b 同じように腕を組んでいるが、相手は自分たちとは違うかもしれない、と思った。
- c 相手が友達になりたいといったので、どういう動作をしたか、気がつかなかった。

2) 相手の動作の本当の意味がわかったか

- | | | | | | | |
|---|------|---|-------|---|-----|---|
| A | わかった | 3 | わからない | 7 | その他 | 5 |
| B | わかった | 5 | わからない | 8 | その他 | 5 |

<わからなかった場合どう思っていたか>

- A 相手は尊敬していると思っただけで、他の国の文化や違う習慣など、考えなかったのは、私の誤りと思った。相手に尊敬されていると思い、うれしかった。

尊敬の意味と思ったが、相手は喧嘩するような話し方をした。もしかしたらけんかしてきたのかと思った。

- B 個人の習慣と思った。ただまねしていると思った。

3) 異文化交流で大切なことは何か

先入観をすてること、説明しなければならない、すぐ真似したりせず、まず観察するように気をつけること。まず相手の国について調べる。相手の動作の意味をきく。

相手の文化を尊重しながら、できるだけ誤解されないように自分のしぐさに気をつける。相手と自分の相違点を知る。誤解しやすい身振りをしたら、はやく説明する。相手の動作や言語は自分とことなっている場合があるので、それだけによって相手を判断してはいけない。相手の眼に注意する。誤解がおこらないようにもっと違う文化について話し合う。相手の風俗がちょっとおかしいと思っても笑わないで相手を尊敬すべき。相手の気になることに気をつける。ほほえみは大切だ。文化の差異をみとめることは大切。

1) について

AもBもaは相手の動作の意味を正確に解釈していなかったケースであるが、相手に対してネガティブなイメージを抱いてしまった場合が多い。(特にBの方が多かった)しかし、わずかではあるが、bのように相手の動作の意味に気付いている場合もみられた。このシミュレーションでは、コンフリクトがかなりみられた。アンケート結果からもわかるように、「腕組みの意味が相手の国と違う」ことに気付いた者は半数にも満たなかったからである。

3) について

相手の文化の知識の必要性、相手の文化への尊敬、自文化中心主義からの脱却、差異を認める、相違点への気付き、説明の必要性、など、様々なことが挙げられた。いずれも異文化を理解するために重要な要素である。

3 「身近な体験と誤解」についてのレポートおよび発表

授業では、この後、実際のこれまでの日常生活の中から自分自身の誤解の体験をふりかえってレポートを作成する。授業での体験を参考に自分自身の「異文化接触における誤解の体験」を自分自身の中で整理し、「意味化の過程」のなかでどのように誤解が起こったのか、そしてその時どう感じたのか、どのように解決したのか等、客観的にふりかえるのがねらいである。授業では、この後、それぞれのレポートの発表をおこなった。それぞれの誤解の体験を共有するためである。以下、学生のレポートを一部紹介する。

a 私は日本にきて、もう二年たった。二年の間たくさんの誤解をしたと思う。最初のころ、日本語が完全にわからないため、ほとんど誤解する毎日を送っていた。アルバイトでウェイトレスをやっていたとき、私の日本語のレベルはあいさつができるぐらいだった。でも一緒にアルバイトした日本人の学生は私を笑顔で迎えてくれた。そのため私はもっとうまくやらなければならないと思って仕事をやっていた。しかし、そういう気持ちをもつとかえって誤解というものがいっぱいできてしまった。「きゅうりをください」といわれたのにキウイと間違えてその人にわたしてしまった。「おもしろい」といいたいくせに「おかしい」といってしまう。酢をコーヒーと間違えてしまった。でも日本人は照れる民族で、だいたい相手の間違いとか直接指摘しない方であるため、ある誤解は気がつかないままずっと続けていた場合がすごく多かった。(中国)

b 日本にきてから私はいくつか誤解したことがあった。私が日本語学校で勉強していたとき、日本人と接する機会はアルバイト先の人の方が多かった。ある日、調理長からある仕事をやらされた。その仕事が出来上がった時、調理長をよんできてよくできたか否かきいてみた。調理長は「いいじゃない？」といった。私は一瞬頭が混乱した。調理長のいいたいのには「良いです」「よくないです」か「わかりません」どちらかはっきりわからない。だから「よくない」と思った私はまたもう一度直そうとした。すると調理長は「もういいです」と大きな声でいった。他の経験は、日本人と外国人と話す時よく「日本語がうまいね！」とか外国人をはめる。はじめて聞くと「私を軽蔑している！」と思ってしまった。その時、本当におこった。実は私の思っていたとおりと違って日本人はそういうのは相手に尊敬するためであった。これらの誤解によって、日本人言葉遣いはとても曖昧であって建て前の場合の方が多いので、率直性が足りないと感じられる。

これらの体験から、異文化交流で大切なことは先入観を捨てることであると思う。戸惑った時、相手にもう一度きいて説明してもらわなければならない。できれば誤解しやすい表情や動作を避けたほうがいいのかもかもしれない。そして互いに尊敬しながら交流するのは国際化における第一歩であると思う。(マレーシア)

c 日本人によく使われている言葉はやはり「すみません」なのだと思う。「すみません」は、本来、過失をわびる言葉だと思う。私の行動では償いきれないおわびの心がつくしきれない、済んでいないということである。一方日本語には、自分の非礼をわびる言葉に「ごめんなさい」「お許し下さい」があるがこれはすみませんほどに使われない。そこでもっぱら

「すみません」となるわけだが、私たち外国人には非常に理解しがたく、誤解しやすい曖昧な言葉のひとつだと思う。

たとえば、日本にきたばかりのことだ。アルバイト先で新人のアルバイトの高校生がいた。私は仕事をしながらいろいろと彼女に教えてあげた。ある日お客さんでこんでいてちょうど忙しいところで彼女が何かを使い終わったので、私は冷蔵庫から新しいのをだしてあげて彼女の前においた。彼女はすみませんと私にいった。しかし、私はその言葉を理解できなかった謝るわけではないから、多分何かの仕事のやりかたがわからないから私に聞きたいので「すみません」といったのかなー、と私は思った。そして彼女に「何？どうした？」ときいた。彼女は「違います。出してくれて、すみませんね」とあわてて私に説明してくれた。なるほど、「すみません」は「ありがとう」という意味もあることをはじめて知った。それから日本人のすみませんにも注意をむけるようになった。そして、この言葉はいろいろなところで使われていることがわかった。（中国）

d ある時日本人の友達が私の部屋に遊びにきて一緒にビデオをみた。それから、そろそろ晩御飯の時間だから私は料理をつくろう、と思った。その時、友達はちょっと帰りたい、といて急いでたつた。私はどうして帰りたいのかときいた。彼女はただ帰りたいと答えた。私はとても帰りたいような彼女の様子を見てから別に何もいわなかった。でも心の中ではもしかしたら私の料理を食べるのがいやなのかなと思った。それからあの時彼女はどういう気持ちだったんだろうと気になってきた。私は思ったことをいってしまう人間だったので、我慢できなかった。だから、彼女にあの時の彼女の気持ちについてちょっと質問した。彼女は「実は長くいると迷惑をかけてしまうかもしれないので、帰った方がいいと思った」と答えてくれた。ふたりともその時はっきりいえばよかったと思った。日本にきてから誤解された場合は少なくないといえる。自分の国とは異なった文化で考え方も違う。文化の差異におどろくこともある。日本文化の特色は何もいわなくてもお互いに理解できるように生きている。でも以心伝心が一概にいいかどうかいえないと思う。場合によってはちがうのではないだろうか。（台湾）

IV まとめ—異文化トレーニングによる日本事情教育の可能性と意義—

以上、誤解のプロセスを考えるための異文化トレーニングによる授業の実践報告をおこなった。水田は異文化トレーニングの基本的な型を分類しているが、授業でおこなったトレーニングは以下のように分類できる。

- 1 back to back 知的アプローチ (Intellectual Approach)
状況認識, 分析型トレーニング
- 2 エクセサイズ2 体験的アプローチ (Experimental Approach)
異文化間相互作用シミュレーション
- 3 エクセサイズ1 状況認識, 分析型トレーニングと異文化間相互作用シミュレーション
の混合の形

異文化トレーニングは、「学習者が体験によって主体的に学ぶことができる」学習方法の

ひとつとして、意義深いのではないかと思う。しかし、このようなトレーニングを行う際、トレーニングのみでなく、終了後の「ふりかえり（ディブリーフィング）」は重要であるといえよう。

「誤解のプロセス」を考える授業の具体的なすすめかたは前節で報告した通りであるが、アンケート、レポートなど、ディブリーフィングに重点をおいている。これは、教室内の体験を「内省」し、「意識化」し自分自身の中に体得させていくためである。授業の目的をまとめると以下のようになる。

- 1 「描写、解釈、評価」のそれぞれで誤解がどのようにおこるのか、実際に疑似体験する。（シミュレーション）
- 2 誤解がおきた時の自分自身の感情、反応について知る。（ふりかえり討論、アンケート結果）
- 3 誤解が起きた時の他のメンバー（相手チーム）の感情、反応について知る。（ふりかえり討論、アンケート結果）
- 4 誤解が起きた時はどのようにすればよいかについて考える。（アンケート、ふりかえり討論）
- 5 異文化交流で大切なことは何かについて考える。（アンケート）
- 6 日常生活の中での自分自身の誤解の体験をふりかえり、「意味化のプロセス」の中で誤解がどのようにおきていたのかを考える。（レポート）
- 7 他のメンバーの誤解の体験を共有する。（レポート発表）

1はクラス内での疑似体験の場、すなわち「誤解のプロセス」を意識化していく過程である。2は自分自身の、3は相手の感情、反応の「意識化」である。4、5は誤解の解決について日常生活の場への応用—すなわち無意識化—への第一歩である。6は無意識に感じていたこれまでの日常生活の中から、実際に誤解の体験を意識化させていくプロセスである。

留学生にとっての日常生活は「異文化接触」の場である。しかし、その中でさまざまな

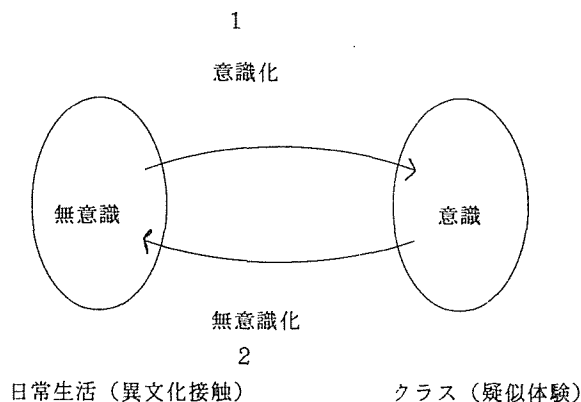


図 4

誤解の経験はふだん特に意識されていない場合も多い。また、意識されたとしても、「誤解のプロセス」を明確に整理し、自分自身の中に位置付けている場合も少ない。

筆者は異文化トレーニングの役割と可能性について図2のように考えている。まず、教室内での異文化トレーニングは矢印1のように異文化接触の場면을教室内に作ることで、「無意識」な日常生活の体験を「意識化」させていくという役割をはたしている。

しかし、異文化トレーニングの目的は単なる「意識化」のみではないと筆者は考える。クラスで得た「意識化」した体験をさらに日常生活の中で「無意識化」させていく過程（矢印2）も矢印1と同様必要である、と考える。これは、教室外での「学習」であるといえよう。この2方向を経てはじめて学習者の中で体得されるのではないか、と思う。

留学生は日常生活の中で「異文化接触における誤解」を日頃多く体験している。しかし、その体験を「意識化」し、整理した形で自分自身の中にとりこむための教授法はあまりなかったのではないだろうか。

本稿では、日本事情教育の一環としておこなった「異文化トレーニング」の手法をもちいた「誤解のプロセスに気付くための授業」の実践報告をおこなった。異文化トレーニングは主にアメリカで開発が進められており、対象学習者もアメリカ人を設定した場合が多い。しかし、工夫を加えることでアジア人留学生を対象としたトレーニングも有効ではないかと考える。

注

- 1) 『国際人間関係論』 p237

参 考 文 献

- Bennets, (1996) Contemporary Methods in teaching English as a foreign language and Intercultural Communication. San Francisco State University
- 徳井厚子・小川誉子美 (1996) 「異文化接触場面におけるコミュニケーションモデルの構築をめざして」 International Journal of Pragmatics Vol 日本プラグマティクス学会
- 西田司他 (1989) 『国際人間関係論』 聖文社
- 西田司著 (1994) 『異文化と人間行動の分析』 多賀出版
- Richard W, Brislin & Tomoko Yoshida (1994) Improving Intercultural Interactions SAGE
(1996年8月22日 受理)